

書 評

Karen CHASE 著

The Victorians and Old Age

溝 口 薫

本書は19世紀ヴィクトリア朝期における老いの概念をめぐる、歴史、社会、文化に関わる事象、その影響、反響、反応を、同時期の文学や絵画などに詳細に検討した学術書である。老いというテーマは、昔から身近な関心を引いてきた問題ではある。老人の表象は、古今東西の文学や芸術にいくらか見られるし、個々の人生の問題として普遍的である。キケロがいかに老年期を過ごすべきかについて書き記した以前から、人々は老いを考察し表現し、それらはいまだに語り継がれ、新たに書きつづられているのである。ただ最近の老年期に関する研究 age studies の隆盛の背景には、20世紀以降顕著になってきた老年をめぐる社会学的医学的概念である「老年期」なる概念を、さらに学際的な観点から再検討する必要に迫られた事情がある。人間に可能な寿命こそ昔とかわらないまでも、多くの人が人生を長く健康で活動的に暮らせる時代となった。その長い人生の後半期は、その時期についていかなる選択が意味深いのか、またどのような影響を受けて老いそのものの経験の意味が定まってきたのか、よりよく生きるために十分な考察が必要になってきたのである。また、子供の出生率が低くなり、人口構成比率の老人が占める割合が高まるたびに、扶養負担の問題が公的な問題となってきたこともある。Age studies は、これまでの歴史的、社会的、地域的、文化的な分野での検証から、多くの成果をあげつつある。例えば、「老年」は、人生の末期という概念である以上に、はるかに複雑で豊か

な多様な経験であること、また、諸制度や文化を通して、種々の反応を生み出し複雑な様相を呈しつつ、今日に至っていることが検証されてきている。本書はそうした age studies という学問や19世紀イギリスにおける老いをめぐる文化論や社会史的成果、歴史研究の種々の成果を踏まえたものである。特にこの「老年期」(senescence) という医学的・社会科学的概念が形成される背景に、老年をめぐる諸社会制度があったことを軸として、それらに刺激されて生まれてきた、老年をめぐる表象や表現、批評や反応を、作品や絵画のみならず、日記やジャーナリズム、諸歴史的文献等において具体的に詳細に検討するのである。

Chase によるならば senescence という語彙が実際に生まれたのは20世紀の最初の10年であるが(1)、そこへ至る過程として、ヴィクトリア朝期はある。時代は医学的・社会的な体制や発想から「老年期」という捉え方を発生させ、次第に「明確に価値を増しながらそれと意識されてゆく」流れを作ってゆくという。この新しい流れが、それまでの多様ではあったが曖昧であった老年についての考え方と接触し、それらが作家や人々の個性に触れつつどのような表象や思考として実を結んでいくのかを、本書は追っていくのである。ただ歴史や文化、社会制度と集団としての諸反応、すなわち文化を作っていく反応と、個々の人間の生きられた反応は様々に異なる。また、その影響も直線的に発展することはなく、不連続的であり、相反する細かな逆流を、幾通りも見せるものである。そのような歴史的な時間のながれのなかの種々の反応の錯綜した関係を、時代を追って整理し、個々の作家や人々の反応を具体的に追跡する著者の姿勢は、あくまでも粘り強く犀利である。

ちなみに背景についての十分な目配りとともに作品分析にも比重をおく本書は、新歴史主義的な文学批評の次によりよく来るべき文学研究の方向を示しておりその意味でも興味深い。文学作品をその他の多様な文献や文化の所産と同様に資料のひとつとして扱う議論は、ともすれば、人間存在の深みの探求や味わいに乏しくなる。しかし、本書は時代のサブカルチャーの多面で細心な視点

を保持しつつ、諸作家の作品をその特有のコンテキストにおき、彼らの「老年」についての反応を的確に作品のなかに詳細に検討してゆく。彼らの表象、彼らの老年の扱い方が、社会的潮流や文化的反応に対して、具体的にはどのような反応であり、どのような意味があるのかを明らかにしようとするわけで、いわば従来の文学の価値を復活しているその意味でも本書は、楽しい。本書の範囲は、ディケンズが活躍を始めた1830年代から、20世紀初頭に至るまで、長いヴィクトリア朝をカバーしている。時期ごとに多様な作家の様々な作品、文献を分析的しつつ、総合しており、個々の作家の分析と時代の総合が一書のなかに見受けられる本書の価値は高い。

いまして本著の仕掛けを詳しく見ておこう。Chase はヴィクトリア朝を貫いて老年期概念形成の中心に、社会における諸制度があったと見ている。救貧院、私設救貧院、定年制、老齢年金と、老年をめぐる社会が形成してきたその諸制度は、結局、老年という概念を範疇化し、規定化し、「正常」化してゆくのだが、その流れのなかで、都市における貧困層の老人の増大という統計的事実や体験が、人々の老年の可視化や特定の意味を帯びた表象に繋がっていく。また救貧院や定年に関する法律、あるいは、老齢年金の設定に関わっては、労働能力によって決定される老年という考え方を生むとともに、労働不能になった扶養者としての老人の出現、国家や若者の当年者への負担の増加をさせる存在としてのイメージをも生んでいく。またそれは若年と老年という世代差、その緊張、イメージの交差、相互に生じる恐怖と怒り、周縁化、融和の方法など、老年をめぐる表現、テーマを多様に展開させる。医学と社会科学の発達によって生まれてきた「老年期」は、かように、老人をめぐる概念を、次第に一つのストーリーのもとにまとめつつ、一方で種々の反応を産む触媒として機能してきたのである。Chase はさらに、階級、ジェンダー、貧富の差、都市と田舎、世代差、スタイルその他によっても、ヴィクトリア朝の文学文化における老年は、多様な顔を見せるとし、詳細なファクターを弁別しつつ、時代の影響と小説家らのその影響に対する反応を跡付けてゆくのである。

ところで本書には巻末に文献リストがない。本書は、先に述べた age studies の種々の先行研究成果に基いているのであるが、残念ながら著述に要したはずの膨大な参考文献記載がなく、例えば前書きで Peter Laslett, Pat Thane, Jill Quagdan, Kathleen Woodward, Pat Jalland, Helen Small などによったことを示す他は、引用文献については脚注があるばかりであり、老年をめぐる諸問題の背景にどれほどの重要な先行研究があったのか、本書からは直接その情報を得ることはできないのである。その意味で age studies 初学者にはいささか不便ではある。

以下章ごとに Chase の多様な議論の一端を追ってみよう。本書は7章構成となっている。最初の章は、まずは救貧院制度をめぐるイギリス社会の事情とディケンズの創造した貧困層老人たちを中心とする考察であるが、ことに *Our Mutual Friend* における Betty Higden の救貧院嫌いとその見事な自立的な行動に関して、こまやかな背景探究を施し、ディケンズ作品の妙味を新鮮な形で捉えており、丁寧な文脈研究が作品分析に新鮮な意味を与える好例を示している。ヒグデンが救貧院に頼らず田舎へ行商にでかける背景には、19世紀を通して老年貧困層の圧倒的増加と、救貧院の地域差、女性の収容者が多かった事情(27)、それだけに救貧院施設の扶養状況が厳しかった事情がある。加えて Chase は、当時の貧困層の老女たちが、それでも自助的生活を敢えて望み、大量生産で先細りになってゆく手作りの品を抱えて地方への行商の生活をし、自助的生活を目指していたと指摘する。すなわちヒグデンの独立自尊の行動は、扶養しきれない都市貧困層老人達のくらしの危うさを背景に、しかしそのような厳しい条件下においてなお自立を求めて従来の伝統的な老人の生き方をしてきた女たちにディケンズが目をとめ、その生に文学的生命を与えたものに他ならないのである。

第二章はトロロップの作品が、私設救貧院制度をめぐる事情と社会の反応から検討される。教会や慈善団体などによって運営される私設救貧院 (almshouse) が注目を集めるようになった時期に書かれた彼の *The Walden* は、

ある私設救貧院に起こった当時の事件に取材している。救貧院受益者にもたらされるべき支援と中間搾取に関する社会問題を、善良な院長の運営する救貧院に起った不当なスキャンダルによってクローズアップしつつ、一方で、スキャンダルに見舞われた救貧院長の、肉体的のみならず、社会的にも名誉を奪われ衰弱して迎えるその死において、彼の精神的には豊かな満足を対置する。老年をめぐる社会的、物質的不満と個人的、精神的満足の対照を通して、Chase は作家が、老年期をめぐる豊かな経験可能性を描いているとする (76)。

19世紀後期初頭には、地域と家族によって老人が支えられていたのであるが (91)、80年代、90年代になると、その時代の反動が起き「道義的な援助」ではなく、「法的援助」が強調され、「公的年金制度」によるサポートへの努力が始まってゆく。援助が十分でないため、ともかく働こうとする老人が多いなか (実際1881年のセンサスでは、65歳以上の73パーセントはまだなんらかの仕事についていた)、出生率の増加とともに必要になってきた若者の労働市場確保のために定年制度が導入される。労働能力の有無によって判定されるその定年制 (初期にはその年齢は職種によって異なり55歳から70歳まで多様であった) によって引き起こされた不安と動揺が形になったのが、トロロップには珍しいSF作品、*The Fixed Age* である。67歳が定年、その後は一年以内に死の準備をすることが公共道徳であると定めた法律を制定した架空の国 *Britannula* の物語を書いたのは作家が67歳のときであった。

第三章は、老年を魔女、鬼婆、幽霊、そして狂気といった表象とともに描くことが多い Gaskell や Oliphant のゴシック的超自然的な作品に注目し、ヴィクトリア朝中期における老年の概念を探る。そこでは、子供を脅かす老いた魔女は同時に老年の惨めさも晒す存在であるが、その衰弱する身体は、一方で活気を留め、世の一般の言説から消えてしまった強烈な体験を暗示する、若さと老いを混交させた存在である。魔女表象は若い世代の老年期への攻撃的な欲望を示すとともに、逆に老人の怒りや恐怖を示すともいえる (113-4)。興味深いのは、Chase がこの時期の彼女らのリアリズム小説もまた、ゴシックや超自然的

な作品と同様、老人の、他の世代とは分かち合えない、そして若い世代はあまり探求しようとはしないその疎外された内奥に暗示的に光を当てる物語になっていると指摘するところである。Gaskell 夫人の *Cranford* について Chase は経済の時代の脅威に対して創造的に立ち向かう異例に豊かな老人の物語とし、そこに描かれる老人は Carroll の物語のなかに描かれる思いがけない老人と同様の光彩を帯びると見る。

第4章は、ヴィクトリア女王という国民的人物がいかに当時の人々に老年期を意識させたが探求される。1860年代を通して女王が種々のテキストや文化所産の重要な呼び物 (154) となることはよく知られている通りであるが、人々は、アルバート公に先立たれ悲嘆にくれて引きこもり急速に老女となった女王に、不安定で落ち着かない老年を見る一方、公的に溢れる強い女王のイメージには権力を代表する老女を、同時に出回った若かりし少女女王であったイメージと比較しては、世代という次元や時の流動性から免れない老年というプロセスを確認したという。またそればかりではなく、国家的人物の老年のイメージは、世紀末に近づくにつれ、人々に、国家自体が老年期にはいったことを感じさせる契機となった。また Carroll のアリス物語は、Chase にいわせれば、この時代の女王に魅入られた文化の感覚を的確に捉えるものだという (157)。『鏡の国のアリス』は実際、女性の権力についての物語である。また自らを老年のアイコンとみなすビクトリア女王の、若い世代の政治家との権力闘争は、世紀末にかけて新旧の世代間の対立のドラマ、new woman の文学、そして若さと老いの対立的テーマを提供することになったとも述べている。

第5章は、特に Wilde の *Dorian Gray* や、ドイツ人にしてロイヤルアカデミー画家に選出された Herbert von Herkomer などのヴィクトリア朝後期の絵画に焦点を当てて80年代、90年代の老年を論じる。Chase によれば、初期モダニストたちのヴィクトリア朝時代の遺物への拒否は、この時期の実態を単純化してみせるが、この時代の反応はもっと複雑であるという。特に世紀末にかけて注目される変化は、老年人口の増加の新たな可視化であり、その形態にかか

わらず、視覚的な形で示される老年という表象、テーマについての種々の問いかけがあることを見る。Chase はヘルコマーの『最後の招集』あるいは、『夕暮れーウェストミンスター救貧院の一場面』などの作品には、当時の老人に対する社会の政治的、社会的、文化的な受容がよく視覚化されているという。体躯を損傷した退役軍人たちはいずれも国家が支えねばならない経済的援助を必要とする老年である。画面周縁に描かれる救貧院の老女たちは彼女らの社会的な位置をよく暗示する。またほかに Frith ら他の当時の画家の作品にも通じる特徴として、老年に対置される若者や子供の配置に関して述べて、そこには、世代間の交流可能性、両者の間の緊張を解く方法が示されているとする (231)。ワイルドの『ドリアン・グレイ』は、老いに対する重荷を感じ始めた後半世紀文化環境の典型的な例であり、老いの意味を逆説的に探つてゆくものととらえることができる。Chase によれば、ドリアンの老化への恐れは単に老衰に対するものばかりではなく、老醜や罪深さが可視化される恐れを表しているという。それは、この時代の老いへの一つの考え方の現れであるという。そこには当時増大する国家負担の原因となる老年世代に対して社会がもった種々の感情、イメージの反映がある。もっともドリアンが示す自らの老醜を示した絵姿への強い関心は、ストレス過剰な都市生活において起こってくる若年層自身の老化への恐怖と関心でもある。だが何よりドリアンにおいてワイルドが実現しているのは、キケロとは正反対の老年の概念であるという。欲望を満足させる能力の衰退とともに、快楽を求める欲望自体の減少が程よくバランスを取って、快楽を強く求めなくなるそのことにこそ、老年のもっとも賞賛すべき価値があるとしたキケロと異なり、ドリアンは、別なる老年を現出させる。老年における欲望は、若年における欲望のように、満足に至らない。欲望の否定を恐れるがゆえに (211)、永久に欲望が満足より上回る貪る食人鬼のような老年の一面を現出させるというのである。

第6章は Old Age Pension Act を中心としつつ展開する。1880年、90年代は、Charles Booth による政府公認の調査委員会が行われ、やがてそれが1908年に

成立する老齡年金法に結びついていく。この制度に象徴的に現れるように、いまや老年については政治的に相対する時代となる。公的なポリシーが制定されるとそのことと、実際に生きられる経験とそぐいが悪くなる例が現れてくる。政治的な扱いが、社会的理性による客観性の増長と主観性の衰亡をとともなうと、福祉という名のもとにいかにひどい苦痛がもたらされるかを Chase は例えば、Beatrice Potter やその友 Herbert Spencer の老年期における手紙や日記等に辿ってゆく。

世紀を通じて、老年への意識の多様化が起こるのは、それは何をおいてもこの世紀に、実際の存在としての老人が見え始めたことに始まる。Chase は、老人たちが一つの集団として認識され、可視化された存在とされていく背景に、老年をめぐる諸制度化があるとする。だが、その社会学的医学的な動きとともに、この老年への重視は、老年という進行する経験についての内的な理解、自己理解への視線の深化を伴ってゆく。そのことのゆえに、この時代の文化の所産は、いまだに私たちの老年についての考察を押し広げてくれる可能性を持つのである。

(Oxford U P., 2009年出版、本部284頁、xiv)

参考文献

- Cole, Thomas R., Kastenbaum, Robert and Ray. Ruth E. (eds) (2000) *Handbook of the Humanities and Aging*. Second edition. New York: Springer.
- Thane, Pat. (ed) (2000) *The Long History of Old Age*. London: Thames and Hudson. 『老人の歴史』(2009) 木下康仁(訳) 東洋書林
- Tucker, Herbert F. (ed) (1999) *A Companion to Victorian Literature and Culture*. Oxford: Oxford U. P.